

研究ノート

ロイヤル・シェイクスピア劇場の喜劇

——『から騒ぎ』雑感

狩野良規*

シェイクスピア研究者とは名ばかり、ロイヤル・シェイクスピア劇団 (RSC) の本拠地たるストラットフォード・アポン・エイヴオンには、23 年間行かなかった。いろいろな事情があったにせよ、あまりにも長いブランク。その間にロイヤル・シェイクスピア劇場は改築されて、^{スラスト・ステージ}張り出し舞台の魅力的な空間に生まれ変わった。

で、実にひさしぶりのストラットフォード詣でで最初に見た芝居は、『恋の骨折り甲斐 (*Love's Labour's Won*)¹⁾』(RSC, 2014 年) だった。えっ、聞いたことのない作品? 僕も知りません。その現存しない^{シェイクスピア}沙翁劇(?) は、実は『から騒ぎ』だったのではないかという推測のもと、『恋の骨折り損 (*Love's Labour's Lost*)²⁾』と二本立てで上演する。つまり、二作を同じ舞台装置^{ダブルビル}で、また主要人

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

- 1) シェイクスピア時代の演目を知るための貴重な史料たるフランシス・ミアズの『パラディス・タミア——知恵の宝庫』(Francis Meres, *Palladis Tamia, Wit's Treasury*, 1598 年) に、シェイクスピア劇のタイトルとして名が挙がっている。
- 2) 舞台は後方の壁に本棚があり、暖炉があり、肖像画が飾られていて、その左右に 2 つの塔が建っている。これはストラットフォードにほど近いチャールコート・パーク (Charlecote Park) のエリザベス朝風のcantree・ハウス、その内観と外観をイメージして組み合わせたものだという。そんな背景とステージ上の道具類の入れ替えによって、各場は屋外にも室内にも変幻自在。

また、シェイクスピア劇は場面の転換が頻繁なため、舞台への出入り口をたくさん作らなければならない。前方に“花道”が 2 本、もちろん舞台後方からも出入りできる。セット付きの床が前後に動き、奈落からの人と道具の登退場も自由自在。場面転換は速い、速い。観客の集中力をとぎらせることがない。

物も同じ役者たちが演じて、日替わりで見せる。

加えて時代設定は——昨今のシェイクスピア劇は、戯曲に書かれている時代では昔すぎる、そこで現代よりちょっとだけ古い時期に舞台を移して上演することが多いのだが——今回は第一次世界大戦（1914-18年³⁾）からちょうど百年ということで、大戦の前後としている。なるほど、『恋の骨折り損』は恋の季節が終わり、真顔の人生が始まる予感で幕が下り、『から騒ぎ』は戦争が終わって将兵が戦場から帰ってくるシーンから始まる。前者は1914年、後者は1918年の出来事とすれば、二作は大戦を挟んだ一対の芝居にできる、と。いろいろと考えてくれますなあ。演出はクリストファー・ラスカム。

『恋の骨折り甲斐』、いや『から騒ぎ』は、若い貴族クローディオがシチリア島のメシーナ知事レオナートの娘ヒーローに一目ぼれし、結婚することになるが、悪意を抱くドン・ジョンの計略にはまって彼女の貞操を疑い、結婚式のその場で罵詈雑言ばりぞうごんを浴びせる。しかし、最後にはドン・ジョンの悪事が露見して、めでたく二人が結ばれるまでを描く喜劇。

もともとこの芝居には、女嫌いで独身主義を標榜するベネディックと彼に輪をかけて男嫌いの才女ベアトリスの恋愛という脇筋がある。この脇筋、もともとはクローディオとヒーローの恋愛模様と対照させて、主筋を引き立たせるために盛り込まれたものであろうが、一度乗り出すと筆が止まらなくなるのが、シェイクスピアの常。ベネディックとベアトリスのことは遊びをふんだんに含んだ罵のしり合い、「機知合戦ウィット・コンバット」の方がすっかり有名になってしまった。

シェイクスピアが30代半ばでものした戯曲である。彼はイングランド史劇とドタバタ喜劇で一躍人気作家となり、しだいに政治の難しさを知り、人間の不

3) 西ヨーロッパにおける第一次世界大戦の重みをご存じか。日本は第二次大戦でアメリカにボコボコにされ、原爆まで落とされたから、そちらにばかり目がいくが、西ヨーロッパでは“先の大戦”といえはむしろ第一次大戦を指すとか。例えば戦死者を比べてみても、フランスは第一次大戦が第二次大戦のおよそ8倍、イギリスも2倍以上。第一次大戦によって、当時のヨーロッパの四大帝国たるドイツ、ロシア、オーストリア、トルコはすべて崩壊した。

可解さを痛感し、でもまだ人生の垢は溜まり過ぎていないころ。『から騒ぎ』は、『お気に召すまま』、『十二夜』と並んで「^{ハッピー・コメディ}幸福な喜劇」と呼ばれる一篇である。

RSC『から騒ぎ』の開幕は病院。スラスト・ステージには鉄のベッドが5つ、メシーナ知事の机とストーブ。ヒーローとベアトリスは看護婦姿である。ベアトリスは最初から毒舌を吐いている。なるほど気の強い、傷病兵に厳しく接する、こんな看護婦がいそうじゃないか。また、レオナートは将校服、おっと、戦場から戻ったドン・ペドロらも軍服である。

レオナートが弟のアントーニオから、クローディオのヒーローへの恋心を知られる短いシーン(1幕2場)は、病院のセットがちょいと後方に引っ込み、舞台の前方にできた狭いスペースで展開する。大劇場なのに、わざと狭い空間で芝居をさせる面白さ。次の1幕3場は、ステージ中央の奈落からビリヤード台がせり上がってきて、ドン・ジョンが玉を突きながら己の邪心を語る。ただ告白するだけではつまらない。何かやりながらしゃべらせるのがコツである。

また、小太りで髪の後退したドン・ジョンは、ほほう、杖をついている。戦場で負傷したのだろう。戯曲では舌足らずな、それゆえに動機がわからず不気味な彼の悪意。だが、彼の外見と表情と、そして杖によって、彼が底知れぬ悪党というよりは、むしろ劣等感にさいなまれている小心者だと、ドン・ジョンの陰湿さの理由^{わけ}を納得させてくれる。

レオナート邸での仮面舞踏会(2幕1場)は、ヒーローの弾くバイオリンの音^ねを聞いているうちに、大きなクリスマスツリーやピアノなどが乗った舞台が前方に出てくる。上手に転換するものだ。そこで歌やらダンスやら、なごやかなホームパーティが始まる。ひょいと仮面をかぶっただけのベネディックに、ベアトリスが彼と知らずに悪態をつく。まあ、リアリズムで考えれば、気づかぬはずはないのだが。

と、他愛ないといえれば他愛ないやりとり、しかしそれをイギリスの観客たちはゆったりと楽しんでいる。シェイクスピア劇だといっても肩肘張らず、日本なら落語でも聞きにきたかのように、自然体で笑い興じる。おっと、僕の見ている3階のバルコニー席から舞台を見下ろすと、最前列の席にいる育ちのよさ

そんな娘さんが、母親と一緒に満面の笑みを浮かべているのが目に入る。ハイソを気どらず、でも素直で教養がありそう。いいな。

エドワード・ベネット扮するベネディックはドン・ペドロに、ベアトリスのそばにはいたくない、どんなささいなご用でもお命じくください、楊枝1本取りにアジアの果てまで行ってもいい、と。

ベネディックをやりこめる陽気で高慢ちきなベアトリスを演じるのは、ミシェル・テリーである。美人ではない、だが今、イギリスの中堅どころではトップの女優だろう、2018年4月からはロンドンのグローブ座の芸術監督に就任することが決まっている。

2幕3場。ドン・ペドロの歌手バルサザーが、「♪ 嘆くな乙女よ、泣いてはならぬ、男は絶えず食わせ者……⁴⁾」と歌う。これ、全シェイクスピア劇の中で最も有名な挿入歌のひとつである。

舞台と客席がすっかり一体となったところで、この芝居の白眉の場面が始まる。ベネディックがカーテンの裏に隠れているのを承知のうえで、ドン・ペドロ、レオナート、クローディオの三人が、「ベアトリスはベネディックにぞっこんなんだってよ〜」、でも今さら好きだと打ち明ける手紙も書けずに苦しんでいる、と。男三人組のでたらめな話に、カーテンの後ろでは物を落とす音が聞こえ、時にベネディックが驚いた顔を覗^{のぞ}かせて短く傍白し、さらに大きなクリスマスツリーの中から顔や手を出し、そのいちばん上の星の飾りに顔を突っ込み、はては感電^{すす}して煤だらけになる。スラップスティックに思いきり笑わせる。なんて他愛ない！けれども、それが単なるギャグに終わっていないのは、シェイクスピアの戯曲のセリフにみごとに呼応しているから。

続く3幕1場では、ベアトリスがヒーローとその侍女の噂話を塔の上方の窓から聞いている。ベネディックはベアトリスに恋焦がれている、しかしベアトリスは自尊心が強すぎて、男を軽蔑しているから始末に負えない、と。

4) “Sigh no more, ladies, sigh no more, / Men were deceivers ever . . .” 恋する乙女たちよ、男に裏切られても、嘆いてはなりません。恋愛は「♪ 男の女のラブゲーム」ってね。違う歌だったかな?!

人間は笑って笑って、その後に真情あふれる告白を聞かされると、とても心に沁^しみるものである。ベネディックもベアトリスも、まんまと騙^{だま}された後にそれぞれひとりで舞台に残り、「俺はベアトリスに愛されているのか」、「ベネディック、私を愛してください、私もあなたを愛しますから」と独白する。

いやいや、お芝居ならともかく、現実にはそう簡単に人間の気持ちは変わらないよ、と言うかもしれない。だが、例えばいつもレポートを厳しくダメ出しするゼミの先生、「あ～あ、なんでこんなゼミに入っちゃったんだろう」とゼミ生がため息をついていたら、同級生が「でも、先生、おまえのこと誉めていたぜ、あいつがいちばん鍛えがいがあるって」。それを聞いたとたん、「わあ、先生、ステキ～!」なんて——(傍白) そんなことがあったらいいな。

逆に、ハンサムで寛大で頭脳明晰で質実剛健で正義漢の先輩が、実は内輪の飲み会では後輩の悪口をさんざん言っていると漏れ伝わってきた。そりゃ、事実を確認する前に、もうその先輩に対するあこがれは半分吹っ飛んでしまうだろう。そうした感情の激変、評価の逆転は、学校でも職場でも、日常けっこうあるのではないか。

我々が人の噂でいかにコロッと心変わりするか。いや、口コミだけではない、今日の情報化社会、テレビや週刊誌や、さらにはインターネット上には、怪しげな情報がウジャウジャしている。どれほど現代人が情報操作されているか。

古典における普遍性とは何ぞや。いつの時代も変わらぬ人間性を探究しているのが古典だとしばしばいわれるが、それは変わらないのではない、ますます増幅されている場合に、我々は古典の普遍性、ないしは現代性を実感するのである。

さて、主筋は同じ情報操作のテーマをもっと深刻に描く。ドン・ジョンがクローディオにヒーローはふしだらな女だと中傷し、おまけに自分の従者が夜、女と逢引きしているところを遠目に見せ、さもヒーローが男と密会しているように信じ込ませる。クローディオはもうイチコロ、結婚式での花嫁罵倒とあいなる。

このお話、デジャヴ感はないか。そう、『オセロー』と同じなのである。あ

の勇氣凛々の英雄將軍が副官イアーゴ^{ざんげん}の讒言とハンカチ一枚のトリックにも
 ののみごとに引っかかって、愛妻デズデモーナの不義密通を疑い、彼女を絞め
 殺してしまう。これも嘘だ〜い、と苦笑したくなるストーリーなのだが、一流
 の俳優が演じる『オセロー』の舞台を見ると、おゝ、なんと人間の愛情や信念
 はくだらぬ情報で容易に崩れ去ることかと、あらためてシェイクスピアの洞察
 力に舌を巻いてしまう。

『から騒ぎ』は『オセロー』の原型となった作品である。人生の垢がまだつき
 過ぎていない時期の沙翁は、ガセネタに対する人間心理の無防備さと脆弱さと
 いう主題を喜劇に収めたが、しかしかろうじて悲劇の一步手前で踏みとどまっ
 たというのも、たしか。

詩人も、当然危ない展開になってきたと気づいた。そこで後半から唐突に田
 舎警官のドグベリーたちを登場させて、ドタバタを演じさせ、芝居がシリアス
 になり過ぎないように取り繕った。4幕2場、たまたま捕らえられたドン・ジョ
 ンの従者を、ドグベリーらが尋問する。狭い取り調べ室が奈落から上がってくる。
 ここも舞台を小さく使う。警官たちと逮捕された者たちがぎゅうぎゅう詰
 めの空間で、ナンセンスなお笑いの一席を演じる。ドグベリーが紅茶——紅茶
 好きなイギリス、取り調べでもまずはお茶だ——のポットで火傷しそうになっ
 たり、書記が部屋から外に出られなくなって四苦八苦したり。

また、ドグベリーは「おまえは警官である俺に疑いの念を払わないのか」と。
 えっ?! これ、敬意 (respect) を疑い (suspect) と間違えた。ベネディックとペ
 アトリスの舌戦はなるほど知的、ウィット・コンバットと呼ばれるのに対して、
 こちらは無教養な人間が威厳を持たせようとして、ことばの誤用を連発する。
 後世には「マラプロピズム (malapropism)⁵⁾」の名で知られている。

ドグベリーに下手くそな役者が扮すると、いかにも浮いた場面になってしま
 うところ。だが、RSCの舞台はニック・ハヴァソンが動きもことばも思いきり

5) 18世紀の喜劇作家 R. B. シェリダンの『恋がたき』(The Rivals, 1775年)で、登
 場人物のマラプロップ夫人 (Mrs. Malaprop) が、気どったことばを使おうとしては
 言い間違いを繰り返し、かえって無知をさらけ出したことからできた用語。

作っているのに、場内は爆笑している。彼は『恋の骨折り損』でも、無学な田舎者コスタード役で好演している。

ちなみにこの舞台は、ライブで映画館に配信した「RSCライブ (RSC Live)」のDVD (輸入盤⁶⁾) が発売されていて、通販で簡単に手に入る。聴覚障害者用の英語字幕がついている。これがすぐれもの。日本語の字幕だと、それをついつい読んでしまって耳が閉じてしまう。お勧めは、まずシェイクスピアの戯曲を (翻訳でもいいから) 読み、ストーリーと登場人物を頭に入れる。そのうえで、英語のサブタイトルをチラリチラリと目にしながら、映像を見、俳優の語る英語のセリフを聞くやり方。教室でもきわめて有効。本場で生の舞台を見るための格好の練習になる。

ベネディックとクローディオはヒーローをめぐって一触即発、あわや決闘か——と、偶然通りかかったドグベリーの支離滅裂な説明により、ドン・ジョンの悪だくみが明らかになる。

終幕はベネディックとベアトリスがなかなか素直になれないながら、お互いの気持ちを語る。シリアスな場面はきちんとシリアスにやる。喜劇だからといって、無理に笑わそうとしない。それがいい。でも、お互いがラブレターを書いていたことが発覚、二人がキスをするころには、片意地を張っていた男女に心が通いはじめて、どちらの毒舌にもトゲがなくなっている。

そう、恋愛は男女の武装解除だ。裸になる。いや、お布団の中で下着を脱げばいいわけではない。この人の前だったらよろいかぶと鎧兜を脱いで、心が裸になれる。この人だったら、信頼して、自分の長所だけでなく短所も、自分の内面のダークな部分も、全部さらけ出せる。しばしば恋をすると、女性は (男性も) きれいになるといわれる。それは自己解放した晴れやかな表情がフッと顔に浮かぶか

6) 同じくロンドンのナショナル・シアターが映画館配信している「NTライブ」は、日本でもおなじみになったが、DVDは発売しない方針をとっている。映画館の大きなスクリーンだけで鑑賞してくれと、それもひとつの見識だが、しかしやっぱりDVDがあると助かるのになあ。例えば、イギリスの劇場の観客が、どこの場面で誰が語るどのセリフで笑っているのかを、英語の字幕を眺めながらじっくりと確認できる。また、字幕をつけたり消したりしながら何度も見れば、語学の勉強にも使える。

ら。若者よ、恋をしよう、そして心をスッポンポンにしよう！

蓄音機から流れる音楽に乗ってダンスが始まり、あれっ、いつの間にか舞台にはベネディックとベアトリスだけが残され、二人がもう一度キス、暗転、すかさず場内から万雷の拍手。戯曲としてのバランスは無茶苦茶、こんなに強引なストーリーで、急転直下の結末で、でも終わってみれば、観客たちは心からハッピーな気分になっている。歌と踊りのシャレたアンコールは2回だけ。オペラやミュージカルのように延々とアンコールが繰り返されることはない。すっきりしている。

ストラットフォードに四半世紀近くも訪れなかったことを、あらためてもったいなかったなあと思いながら、幸福感いっぱい夜道を帰路についた。

(2018年1月 脱稿)